

本居宣長の音便論

松 繁 弘 之*

1. はじめに

本居宣長（1730～1801）は『古事記』を解説するための手段として字音を研究し、その著作として『字音假字用格』（1776 刊）・『漢字三音考』（1785 刊）・『地名字音転用例』（1800 刊）がある。（引用に際し表記を改めた場合がある。また引用末尾に引用開始頁を示す。）

ところで、『漢字三音考』には、「附録 音便ノ事」として音便（こゑのたより）が論じられてゐる。これは従来、研究史においてその内容が高く評価されてゐる。例へば、田辺（1976）には次のやうにある。

例えば、「語意」「和字大観鈔」など、先人の著にも音便研究が見えないではないが、三音考ほど統括的に詳密に音便現象を研究したものは無い。中に、真字（マナ）をマンナ、南をミンナミといふのは、仮字（カリナ）をカンナ、東（ヒムカシ）をヒンガシといふのにならつて添へたと見たあたり、今日類推 analogy と呼ばれる見方と通じる所があつておもしろい。245

さらに、林（1989）にも次のやうにある。

これが本書の巻末に付されたのは、音便を漢字音の影響によって生じた“正音”にあらざる現象であると解釈したためで、「音便」そのものについても、そういう考え方に添った——すなわち、日本の古言には存在せず、漢字音の影響で、“中昔”より現れた現象とする——とらえ方がなされている。安易に音便を発音の便宜をはかる変化とみなすような考え方に比べると、はるかに一貫した歴史的解釈がなされており、こういう面にも宣長の見識が示されている。83

しかしながら、『地名字音転用例』と比較すると明らかなやうに、その記述は一貫性に欠けてをり、その内容を把握することは容易ではない。したがつて、まづ音便の記述を整理し、そのうへでその内容を検討することが必要であると思はれるが、管見の限り、先行研究においてはそれが未だなされてゐない。本稿はその整理と検討を目的とする。以下、まづ宣長の

*人文学部・非常勤講師ー日本語学

言語観を確認し、次に音便の規定を明確にし、そして記述を整理して検討する。

2. 宣長の言語観

宣長の言語研究は「古の道」を解明する学問のためになされてゐる。「古の道」は書物に記されてをり、それを理解するためには言語的知識が必要である。そして、その言語的知識の習得にはその運用が不可欠であり、それによつてこそ自覚的に言語を駆使することができると宣長は考へてゐる。『うひ山ぶみ』に次のやうにある。

すべてみづから歌をもよみ、物がたりぶみなどをも常にみて、いにしへの人の、風雅〔ミヤビ〕のおもむきをしるは、歌まなびのためは、いふに及ばず、古の道を明らめしる学問にも、いみしくたすけとなるわざなりかし、6

すべて万ツの事、他のうへにて思ふと、みづからの事にて思ふとは、浅深の異なるものにて、他のうへの事は、いかほど深く考へても、他のうへの事なれば、なほ深くいたらぬところあるを、みづからよむになりては、我ガ事なる故に、心を用ること格別にて、深き意味をしること也、さればこそ師も、みづから古風の歌をよみ、古ぶりの文をつくれとは、教へられたるなれ、18

このやうな創作によつて言語を獲得する方法において、宣長が最も重視することは言語的差異である。宣長は古風の歌や新古今風の歌を詠むのであるが、時代的に異なる言葉や文体的に異なる言葉を区別して用ゐることに對して細心の注意を払つてゐる。また、そのやうな差異を区別することこそが「古の道」を明らかにすることに通じてゐるのである。『うひ山ぶみ』に次のやうにある。

さて吾は、古風後世風ならべよむうちに、古と後とをば、清くこれを分ちて、たがひに混雑なきやうにと、深く心がくる也、24

古と後との差別をだによくわきまふるときは、後世風をよむも、害あることなし、にくむべきことにあらず、たゞ古と後と混雑することをこそ、きらふべきものなれ、これはたゞ歌文のうへのみにもあらず、古の道をあきらむる学問にも、此わきまへなくては、おぼえず後世意にも漢意にも、落入ルこと有べし、古意と後世意と漢意とを、よくわきまふること、古学の肝要なり、25

さて、宣長は言語の歴史的変遷を上古・中古・近世に区分してゐる。上古と中古とについては『古事記傳 一之巻』に次のやうにある。

又凡て漢のうつりのみにもあらず、古へと後ノ世との差〔タガヒ〕有りて、語のふりいたく異〔コト〕なること多し、大かた那良〔ナラ〕よりあなたのをば、古語と定むべし、今ノ京になりてこなたは、すべてのいひざまも、古へと変〔カハ〕りたること多く、或は音便〔コエノタヨリ〕によりて、顔〔クヅ〕れたる言も多し、【音便の言は、凡て古

書の訓には用ふまじきことなり、大御神〔オホミカミ〕を「おほんがみ」臣〔オミ〕を「おん」と読みたぐひこれなり、書紀の訓には、かくさまの音便の言おほし、○古今集を始めて、物語文などのたぐひは、中古〔ナカムカシ〕の雅言〔ミヤビゴト〕なり、伊勢源氏この餘〔ホカ〕も物語は、本より假字もて書きたる物なる故に、返〔カヘリ〕て古書よりは、語〔コトバ〕つきに漢氣〔カラケ〕のまじらずて、まされることあり、さるは漢文より出たる語も多く字音の言もおほかれども、それながらに皇国ノ語のふりにかければ、漢ならざるなり、なほ中古の文の事も、別に委き論あり、】34

つまり、奈良時代以前は上古であり、平安時代以降が中古である。また、近世については『玉あられ』の「序」に

のりなが、近きよの此わろきくせを、世ノ人どものさもえさとらで、たゞよしとのみ思ひをるが、かたはらいたさにそれおどろかさまほしくて、常にみゝなれたることども、おもひ出るまゝに、これかれと書出て、いささかづゝさだめいへり、もらせることはなほいと多かるを、そはみななずらへてもさとりねかしとぞ、ちかき世のくせとは、廿一代集過後のをいへり、さるは中ごろより新続古今集までの歌は、玉葉風雅の二つの集をのぞきては、大かたおなじさまにて、ことなるわろきくせも見えざるを、其後になりてなむ、いたくいにしへとはかはりて、聞なれぬことどもの、おほく出まうできつれば也、467

とあるやうに、廿一代集の最後となる『新続古今和歌集』（1439成立）以降を近世としてゐる。以上、要するに、宣長は

上古：奈良時代以前

中古：平安時代から室町時代前半まで

近世：室町時代後半以後

と考へてゐるといへよう。

3. 音便の規定

3.1 音便の発生とその原因

まづ、宣長が音便をどのやうに考へてゐるかを検討する。音便の発生の時期とその原因とについて、「音便ノ事」の冒頭に次のやうに述べてゐる。

皇国ノ古言ハ五十ノ正音ヲ出ズ。其餘ハ皆濁雜不正ノ音ナル故ニ。一ツモ厠フルコトナカリキ。然ルニ中古以来雅言トイヘドモ。雑音ノ厠レル事アルハ。漸ク久シク漢字音ニ馴テハ。オノヅカラ其外国ノ音ノ正シカラズイヤシキ事ヲオボエズ。後世ニ至テハ。却テ字音ノ語ヲ雅也ト心得テ。「ケフ」「アス」ト云ヨリハ。「コンニチ」「ミヤウニチ」ト

云ヲヨシトシ。「ニシヒムカシ」ト云ヨリハ。「トウザイ」ト云ヲヨシトスル事ニナリテ。年々月々ニ字音ノ語ヲ用ル事多ナリユクメリ。抑古ヘハ字音ヲバイヤシメテ。読書トイヘドモ訓ニヨマル、限リハ訓読ニシ。又字音ノ物ノ名ナドモ。常ノ言ニハナダラメテ。「才」ヲ「サエ」。「芭蕉」ヲ「ハセヲ」。「襖」ヲ「アヲ」。「簞簞」ヲ「ヒチリキ」。「双六」ヲ「スゴロク」。「博士」ヲ「ハカセ」。「消息」ヲ「セウソコ」。「朱雀」ヲ「スサカ」ナドヤウニ。皇国言ニ近ク転ジテ呼タリキ。然ルニ中昔ヨリ。漸クニ字音ノイヤシキ事ヲオボエズナリテハ。是ヲ嫌ハザルノミナラズ。皇国言ニサヘ音便ト云フモノ出来テ。字音ノ如ク云ヒナス事多シ。【連声ノ便ニ随ヒテ。清音ノ濁音ニナリ。或ハ平上去ノ三声タガヒニ転ズルナドハ。上古ヨリコレアリ。今此ニ云音便ハコレニ異ナリ。】是レモト字音ヲ呼ヒ馴タルヨリ移レル者ニシテ。皆正音ニ非ズ。外国侏離不正ノ音ニシテ。甚鄙俚ナル者多シ。423

このやうに宣長は、上古には音便はなく、中古から音便が発生したと考へてゐる。その原因は字音の影響であり、かつ、それを促す字音に対する価値意識の変化である。つまり、上古では字音を不正な音であるとし、読書に際しては可能な限り訓読し、訓読できない場合は字音を和語の音に近似させて呼んでゐたが、中古以来は字音を正しく雅な音であるとし、和語を字音のやうに呼ぶことが多くなつたと宣長は考へてゐる。また、注意すべきことは、上古の音の変化として清音が濁音になることや、音調が変化することを挙げてゐるが、これらは音便の規定からは除外されてゐることである。これらは字音のやうに呼ぶことではないからである。

3.2 音便の形態的分類

宣長は音便を字音の影響と考へることから、音便の形態を字音と対応させる。まづ字音を『漢字三音考』『皇国字音ノ格』で次のやうに分類してゐる。

此方ノ字音ニ五ツノ別アリ。単音。イノ韻。ウノ韻。ンノ韻。入声。是ナリ。サテ入声ノ韻ニ又ク・キ・ツ・チ・フノ五ツアリ。400

つまり、字音を単音・イノ韻・ウノ韻・ンノ韻・入声ノ韻の五つに分類してゐる。一方、音便をイ・ウ・ン・急促〔ツマ〕ル声・ハノ行ノ半濁音の五つに分類してゐる。「音便ノ事」に次のやうにある。

上件音便。イトウトント急促〔ツマ〕ル声トハノ行ノ半濁音ト凡テ五ツニシテ。此外ハアル事ナシ。【字音連用ニアヤワノ行ノ音ノ他音ニナルモ。皆上ノンノ韻急促ル韻ニ引レテ然ルモノ也。】然ルニ漢字音ノ韻モ亦イトウトント急促ル声ト四ツニシテ。ハノ行ノ半濁音モ韻ニハ非レドモ。コレ亦漢国ノ音ニ多ケレバ。凡テ五ツニシテ。音便ノ五種全ク是ト同ジ。諸ノ音便皆漢字音ヲ呼ヒ馴レタルヨリウツレルモノ也ト云事。コレヲ以テ決スベシ。サレバ古言ニハコレアルコトナケレドモ。奈良ノ御代ノ末ツ方ナドヨリヤ

アリソメケム。上ニ引ル頭申ナドノ類ハ。ヤ、古ク聞エタリ。431

音便を字音と比較すると、イとウとンは字音と同一であるといへるが、急促ル声とハノ行ノ半濁音はさうといへない。しかし、宣長は「凡テ五ツニシテ。音便ノ五種全ク是ト同ジ」と述べてゐるやうに、それには理由がある。

まづ急促ル声について、宣長は「外国ノ入声」は「皇国ノ字音ノ入声」とは異なるものであると考へてゐる。即ち、「外国ノ入声」は「顕ナル韻」がなく、「皇国ノ字音ノ入声」にはそれがあると考へてゐる。音声学的にいふと、「外国ノ入声」は閉音節、つまり子音で終はる音節であり、「皇国ノ字音ノ入声」は開音節、つまり母音で終はる音節である。『漢字三音考』「外国ノ音正シカラザル事」に次のやうにある。

○外国ノ入声ハ。皇国ノ字音ノ入声ノ如キ。ク・キ・ツ・チ・フ等ノ顕ナル韻ハ無クシテ。単音ノ如クナレドモ。正シキ単音ニハ非ズ。其尾物ニユキアタリタル如クニ急促リテ。喉ノ内ニ隠タトシテ韻ヲ帯ベリ。此方ニテ悪鬼一旦鬱血悦氣臆見甲子吉凶ナドト連ネ呼フトキノ。悪一鬱悦臆甲子吉等ノ音ノ如シ。384

そして、「皇国ノ字音ノ入声」も音便によつて「外国ノ入声」と同じやうに呼ぶと宣長は考へてゐる。『漢字三音考』「皇国字音ノ格」に次のやうにある。

サテ件ノク・キ・ツ・チ・フノ五ツ共ニ。連用ノトキハ。下字ノ音便ニヨリテ。喉ノ内ニ急促テツノ韻ニ呼ブ事多シ。但シ是ハ中古以来ノコトナルベシ。【キノ韻ノミハ。今モ音便ニウツラザルモノオホシ。】406

したがつて、「皇国ノ字音ノ入声」と急促ル音とは一般には同一ではないが、連用による音便の場合には同一であるといへる。

次にハノ行ノ半濁音について、宣長は「韻」ではないが、半濁音は古言に存在せず、字音によつて用ゐられるやうになつた音であるとして考へてゐる。『漢字三音考』「外国ノ音正シカラザル事」に次のやうに述べてゐる。

○又外国ニハ。ハヒフヘホニ清濁ノ間ノ音アリ。……此レ殊ニ不正鄙俚ノ音ナリ。皇国ノ古言ニ此音アル事ナシ。384

したがつて、半濁音は音便による「単音」であるといへよう。

以上、要するに、宣長は字音の分類を音便の分類に援用してゐるといへよう。

3.3 音便に対する価値意識と歴史的展開

宣長は古言を基準として、音便が古言に類似するかによつて次のやうに三つに區別してゐる。即ち、

I：イ・ウ

II：ン

III：急促ル声・ハノ行ノ半濁音

である。

まず、イとウについては、古言と同じく清音であるためやや正しく、中古以前から用ゐられてゐるとする。

サテ上件五ツノ中ニイトウトハ。言ノ中下ニ置クトキコソ不正ニ渉レ。其音ハ五十ノ清音ノ外ナラザル故ニ。同ジキ音便ノ中ニ此二ツハヤ、正シケレバニヤ古ク聞ユ。サイバラノ古本ニモ。花ノ開〔サキ〕タルヲ左伊多留〔サイタル〕トイヒ。左介呼太宇戸天太戸恵宇^三〔サケヲタウベテタベエウテ〕。マタ狛人〔コマビト〕ヲ己未宇止〔コマウド〕ナドアリ。和名鈔ニモ。人ヲウドト云類ナドハ往々ニ見エタリ。431

次に、ンについては、古言には存在しないため不正であるが、中古以降に多く用ゐられるやうになつたとする。中古以前における字音のンはウに変化させられてをり、また中古以降においてウとンとが併存するものもあつた述べてゐる。

次ニンハ。本ヨリ不正ノ声ナル故ニ。此音便ハ古クハ見エズ。……字音スラ判官ヲ「ホウグワン」。柑子ヲ「カウジ」。林檎ヲ「リウゴウ」ト云ル類アレバ。マシテ皇国言ニハ。「ン」ノ音ヲバ用ヒザリケムコトオシハカルベシ。然ルニ中古ノ物語書ナドニ至テハ。此音便モイト多シ。困シヲ「コウジ」ト云ルカト思ヘバ。却テ又封ジヲ「フンジ」ト云ル類モアレバ。ソノカミ既ニウトトント二ツノ音便同ジホドノコトニゾアリケム。431

そして、急促ル声とハノ行ノ半濁音については、古言に存在しないために不正であり、中古までは用ゐられることがなかつたが、近世以降に多く用ゐられやうになつたとする。しかし、今の世でも雅言には用ゐないとしてゐる。

次ニ急促ル声ト。ハノ行ノ半濁音トハ。殊ニ不正鄙俚ノ音ナル故ニ。中古マデハサラニモイハズ。今時トテモ歌物語ナドヲ読ムニハ。ヲサ、コレヲマジフル事ナシ。……然ルニ後世ハ書ヲヨムニ。此ノ急促ル韻ト。ハノ行ノ半濁トノ音便ヲ。殊ニ多ク用ヒテ。返テコレヲ雅ナル如クニ心得メルハ。物ヨムヤウノイタク鄙俗ニナリヌル也。漢籍トイヘドモ。風雅ノ道ヲ思ハム学者ハ。心シテ読ムベキ事ニナムアリケル。431

以上要するに、音便はⅠからⅢへと発生し、新しいものほど不正であると宣長は考へてゐるといへよう。

4. 整理の方針

宣長は音便の用例を挙げてゐるが、その記述は一貫してゐない。しかし、混乱した記述といふわけではなく、大体の分類はされてゐる。宣長が用例を分類する観点のうち、全体を通じて見られるものは、方法と本音と品詞と語種・文体とである。この観点に基づいて本稿では用例を整理し、表を作成する。

まず、方法については、添加と変化とがある。添加は音便の音を「添ヘテ云」ふものであ

る。また、変化は本音が音便の音に変化するものである。宣長の記述においては、まづ添加による音便を挙げ、次に変化による音便を挙げてゐる。本稿の整理もその順による。

次に、本音については、五十音の縦と横の順がある。宣長の記述においては、縦（アイウエオ）の順は一貫してゐるが、横（アカサタナ）の順は一貫してゐない。横の順が一貫しない理由は不明であるが、本稿の整理もほぼ宣長の挙げてゐる順に従ふ。

そして、品詞については、その記述は明確ではない。「活ク」や「辞」などの術語は用ゐられてゐるが、「体言」や「用言」などの術語は用ゐられてゐない。本稿の整理では便宜的に現代の品詞分類によつて整理する。

最後に、語種・文体については、雅言と俗言と漢籍読〔クラブミヨミ〕と字音とがある。宣長は和語と漢語とを区別し、さらに和語を雅言と俗言と漢籍読とに区別してゐる。本稿の整理では、用例において語種・文体が区別される場合、まづ雅言、次に俗言、そして漢籍読、最後に字音を挙げる。なほ、和語の文体に対する価値意識については、『玉あられ』に述べられてゐる。

序などの終りを、「いふことしかり」ととぢむる、これも漢文にて、いみしきひがこと也、すべてこゝとかしことは、詞のつづけぎまいひぎま、異なる物なれば、いさゝかにても、かの国文のふりをば、まねぶまじきわざなるに、世の人、こゝの文のさまをば、むげにえしらず、たゞはしゞゝ見なれたる、漢文の詞つきを用ひて、まぎらかしおくことは、かへすゞゝ見ぐるしきわざぞかし、雅言（ミヤビゴト）をしらざらむには、中々にしか漢文のふりならんよりは、俗語（サトビゴト）ならむこそまさりたため、498

要するに、最もよいものは雅言、次いで俗言、最後に漢籍読である。

5. 音便の記述とその整理

以下、それぞれの音便について内容を検討し、上述の観点によつて用例を整理して表を作成する。

5.1 イト云フ音便

(1) この音便においては、全体を通じて見られる観点以外として、方法に長音化と表記によるものがある。長音化はこの音便に限られる。また、表記については次のやうに述べてゐる。

家司ヲケイシト云モ此例也。【是ハケヲ引タルモノナレバ。口語ニハケエシト云ヲ。ケイノ字音ノ格ニナラヒテ。仮字ニハケイシト書ク也。】424

これは『漢字三音考』『皇国字音ノ格』の説明と関係してゐる。

○イノ韻トハ。斎佳皆灰哈等ノ韻ノ字。及ビ清青ノ字ノ漢音等是レ也。此中ニ佳皆灰哈ノ韻ノ字ハ。韻ノイヲ正シク呼ビ。斎清青ノ韻ノ字ハ。韻ノイヲ音便ニテエト呼ブ。【エイハエ。ケイハケエ。セイハセエ。テイハテエ。ネイハネエ。ヘイハヘエ。メイハメエ。レイハレエ。エイハエエ。ト呼ベリ。】是レハイノ類音ニテ。殊ニ親シキ故ニオノヅカラ然ル也。サレドモコレハハ中古以来ノコトニコソアラメ。古ヘハ正シクイト呼シナルベシ。仮字ニハ今トテモイトノミ書テ。エト書クコトナシ。401

つまり、字音の表記の類推によるもので、実際はイではなくエの長音となる。これをイト云フ音便とすることには問題があると思はれるかもしれないが、宣長は字音との類似を指摘してゐるのである。

(2) また、上述の観点以外として、口頭語と文章語との区別について述べてゐる。ただし、用例は挙げられてゐない。

中下ナルヒハ。口語ニハ皆イト云。【是ハヒノミナラズ。ハヒフヘホハ。中下ニアルヲバ皆ワキウエヲト云リ。ハヲワト云例ニヨラバ。是ハヒトスベケレドモ。姑クイノ条ニ出セリ。】423

これは文体に関はず、表記としてはヒであつても、音声としてはイであるといふことである。注意すべきことは、語中・語尾のハ行はワ行に変化すると想定してをり、ヒはキともすべきであるとしてゐることである。なほ、岸田（1984）によれば、大槻文彦以後では表記の改変を伴ふか否かによつて「ハ行転呼音」と「音便」とを区別することが一般化したといふ。

大槻文彦は、『広日本文典』において、語中・語尾のハ行音がワ行音に転ずる現象に「転呼音」といふ名称を与えたのであるが、「音便」と「転呼音」の区別について、次のように述べている。

「前ニ言ヘル転呼音・連声等モ畢竟ズレバ同ジ音便ナルベケレド、書ニ筆スル上ニテ、音ヲ変ズレドモ仮名ヲ書キ替ヘズ、此ニ言フ音便ハ、音変ズレバ、仮名ヲモ変ズ、因テ、今ハ、別チテ説ケリ。」(p 三七)

このように、「音便」と「ハ行転呼音」とを表記の上から区別する考えかたは、その後の多くの学者がこれを継承している。549

(3) さて、用例を整理すれば表1のやうになる。(宣長が用例を挙げてゐないものについては「―」を記す。また、品詞については、名詞は名、動詞は動、形容詞は形、形容動詞は形動、副詞は副、接統詞は接、助詞は助、助動詞は助動、活用は活とする。以下、同様とする。)

5.2 ウト云フ音便

(1) この音便においては、全体を通じて見られる観点以外として、イト云フ音便と同様に、口頭語と文章語との区別がある。ただし、用例は挙げられてゐない。

又中下ナルフハ。口語ニハ皆ウト云。424

表1 イト云フ音便

方法	本音	品詞	文体	本音の用例	音便の用例
変化	キ	名	雅言	朔（ツキタチ） 前比（サキツコロ） 幸（サキハヒ） 后（キサキ） 三枝（サキグサ） 置賜（オキタミ） 秋田（アキタ） 当麻（タギマ） 築土（ツキヒヂ） 透垣（スキガキ） 髪搔（カミカキ） 衝重（ツキガサネ） 吹革（フキガハ）	ツイタチ サイツコロ サイハヒ キサイ サイグサ オイタミ アイタ タイマ ツイヒヂ スイガイ カウガイ ツイガサネ フィガウ
				ヨキ アシキ	ヨイ アシイ
		形動	雅言	（漢籍読に同じ）	（漢籍読に同じ）
			漢籍	大（オホ）キニ	オホイニ
		動活	雅言	（漢籍読に同じ）	（漢籍読に同じ）
			漢籍	行（ユキ）テ 置（オキ）テ	ユイテ オイテ
	ヒ	—	口語	—	—
長音	シ	名	字音	四時 詩歌 飲食	シイシ シイカ インシイ
表記	ケ	名	字音	家司	ケイシ

また、注意すべきことは音便と「通音」とを区別してゐることである。

【以上ハヒフヘホヲウト云者ヲ。ハノ行ノ通音ト心得テ。多クフト書クハ誤也。通音ニハ非ズ。和名抄ニコレカレ出タルミナ「宇」ト書リ。音便ナレバ也。】424

そして、フがウとなるものは「再ノ音便」によつて「ヲ」と呼ぶことが多いとしてゐる。

凡テ中下ナルハヒフヘホヲバ。口語ニハ皆ワキウエヲト呼フ例ナル。【仮字ニハ本音ノマ、ニ書ナリ。】其中ニウヲバ。書ヲ読ミ歌詞ヲ誦シナドスルニハ。又再ビ音便ニテ。ヲト呼ブ事多シ。「合（アフ）」「負（オフ）」ハ「ア・ウ」「オ・ウ」ト呼フベキ例ナルヲ。共ニ「オヲ」ト呼ビ。「歌（ウタフ）」ヲ「ウトヲ」。「舞（マフ）」ヲ「モヲ」ト呼ベリ。凡テ「アフ」「カフ」「サフ」「タフ」「ナフ」「ハフ」「マフ」「ラフ」。又「オフ」「コフ」「ソフ」「トフ」「ノフ」「ホフ」「モフ」「ヨフ」「ロフ」。又「テフ」「エフ」ト云類ノ言ヲバ。皆「オヲ」「コヲ」「ソヲ」「トヲ」「ノヲ」「ホヲ」「モヲ」「ヨヲ」「ロヲ」「チヨヲ」ト呼ビ

これを整理すると、まづ、第一・第五・第四ノ音の後のフがある（□□は引用中にないものである）。

第四ノ音： テフ エフ

第四ノ音： チヨヲ □□

○ウノ韻トハ。東冬江蕭霄肴豪唐庚耕蒸登尤侯幽等ノ韻ノ字。及ビ清青ノ韻ノ字ノ異音等是レナリ。此中二韻ノウヲ正シク呼フ者ハ。イウ・キウ・シウ・チウ・ニウ・リウ。又クウ・スウ・ツウ・フウ・ユウ・シュウ・チュウ等ノミニシテ。【但シイウハユウ。キウハキユウ。シウハシユウ。チウハチユウ。ニウハニユウ。リウハリユウト呼ブ。】其餘ハ皆音便ニテオト呼ブ。【オウハオ。 コウハコ。 ソウハソ。 トウハト。 ノウハノ。 ホウハホ。 モウハモ。 ロウハロ。 ヲウハヲト呼ビ。 ヨウハヨ。 キョウハキョ。 ショウハシヨ。 チョウハチヨ。 ニョウハニヨ。 ヒョウハヒヨ。 ミョウハミヨ。 リョウハリヨト呼ブ。サテ又アウヲ。 カウヲ。 サウヲ。 タウヲ。 ナウヲ。 ハウヲ。 マウヲ。 ラウヲ。 ワウヲト呼ビ。 エウ。 ヤウヲ。 ケウ。 キヤウヲ。 セウ。 シヤウヲ。 テウ。 チヤウヲ。 ネウ。 ニヤウヲ。 ヘウ。 ヒヤウヲ。 メウ。 ミヤウヲ。 レウ。 リヤウヲト呼ブ。此類ハ韻ノミナラズ。音ヲサヘ転ゼリ。】是レオハウノ類音ニテ。殊ニ親シキ故ニ。オノヅカラ然ル也。サレド是亦中古以来ノコトニコソアラメ。古ヘハ皆正シクウト呼シナルベシ。……仮字ハ今トテモ皆ウトノミ書テ。オトハ書ズ。401

第四ノ音：エウ ケウ セウ テウ ネウ ヘウ メウ レウ □□

第四ノ音：ヨオ キヨ シヨ チヨ ニヨ ヒヨ ミヨ リヨ □□

(10)

相違する点として、第一に、前者では「～ヲ」とあり、後者では「～オ」とあることである。なぜこのやうに一致しないのかは不明である。ただし、ウを添加する用例の記述においては一致してゐる。したがつて、表記に関しては一貫してゐないといへよう。

コレラハ皆口語ニハ。「マウケ」ハ「モオケ」。「タウヅ」ハ「トオヅ」トヤウニ呼リ。

是又カノ字音ノウノ韻ヲ多ク音便ニテオト呼フト同ジ格也。424

第二に、「エフ」に関する点である。前者では第四ノ音が二つ挙げられてゐるだけであり、そのうちの「エフ」は音便が挙げられてゐない。ただし、「音便ノ事」には「エヒ」が「エウ」となる例が挙げられてゐる。

サイバラ古本ニ「酔而」ヲ「恵宇天（エウテ）」トカケルヲ以テ証トスベシ。然ルヲハノ行ノ通音ト心得テ。フト書クハ非也。音便ニフト云例ナシ。425

一方、後者では「エウ」もその音便も挙げられてゐない。なぜ挙げられてゐないのかは不明である。

ところで、この「再ノ音便」で注意すべきことは、価値意識が雅語と俗語とでは逆になることである。つまり、雅言は字音の影響による「再ノ音便」によつて正しくなくなり、俗言は「再ノ音便」がないことによつて正しいからである。

抑コレラモ古ヘハ皆本音ノマヽニゾ呼ビタリケム。ソハ何ヲ以テ知ルゾト云ニ。今俗ノ平話ニハ。却テ此ノ再ビノ音便ハ無クシテ。「合（アフ）」ヲバ「ア○ウ」。「負（オフ）」ヲバ「オ○ウ」。「歌（ウタフ）」ヲバ「ウタ○ウ」。「舞（マフ）」ヲバ「マ○ウ」トヤウニ呼テ。ウヲト呼ブコトハナシ。【故ニ「合」ヲモ「負」ト混ジテ。共ニ「オヲ」ト呼テ。上ノ音マデ転ズル事モナク。上ヲモ本音ノマヽニサダカニ呼ベリ。】若シ上古ヨリ「オヲ（負）」「ウトヲ（歌）」「モヲ（舞）」トヤウニ呼テアラマシカバ。後世ハイヨヽ、然呼ブベキニ。今ノ平話ハ却テ然ラザルヲ以テ。古ヘヲ推シ量ルベシ。昔シ音便ニ呼シ言ノ。後ニ正シキニ復レル例ハナケレバ也。【右ノ類ハヒフヘホヲワキウエヲト呼フ音便ハ。今モ同ジ事ナレドモ。コレモ上古ハ本音ノマヽニ呼シナルベシ。】然ルヲ人皆「ア○ウ」「オ○ウ」「ウタ○ウ」「マ○ウ」トヤウニ呼ブヲバ俗言ト心得。「オヲ」「ウトヲ」「モヲ」トヤウニ呼ブヲ雅言ト思フハ。中古以来書読ノ音便ニ馴タル故ナリ。425

(2) さらに、全体を通じて見られる観点以外として、中央語と方言の区別がある。

又カキクケト活クク。ナド云事多シ。今時ノ言ハ凡テ然也。【但シ東国人ハ今モ多ククト云ナリ。】424

これは、宣長が『玉勝間』「みなかにいにしへの雅言（ミヤビゴト）ののこれる事」において、次のやうに述べてゐることに関係する。

すべてゐなかに、いにしへの言ののこれること多し、殊にとほき国人のいふ言の中には、おもしろきことどもぞまじれる、415

つまり、中央語では音便となる語が方言では音便とならないといふことを指摘してゐるのである。したがつて、そのやうな方言の方が正しいことになる。また、中央語と方言

とでは別の音便となる場合も指摘してゐる。

「取出（トリイデ）」ヲ「トウデ」ト云ルハ。リヲウト云ル也。【コレハ此ノ伊勢ノ国ナドノ鄙言ニ。「取出（トリダ）ス」ヲ「トンダス」ト云ト同類ノ音便ナリ。】424

- (3) 宣長は字音の入声をウとするものが音便ではない可能性を注意してゐる。

但シ此類ハ。入声ノ韻ヲナダラメテウト云ルニテ。音便ノ例ニハ非ル事モアルベシ。424

なぜなら、それは『漢字三音考』「皇国ニシテ漢字音ノ始」に述べられてゐるやうに、字音を和語のやうに変化させたものであるからである。

然レバ其時ノ字音。必彼国ノマヽニハアルベカラズ。或ハ拗音ヲ直音ニツバメ。或ハ通音ニ転ジ。或ハ鼻声ヲ口声ニ移シ。或ハ急掣〔ツマ〕ル韻ヲ舒緩〔ユルヤカ〕ニ改メナド。凡テ不正鄙俚ノ甚シキ者ヲバ除キ去テ。皇国ノ自然ノ音ニ近ク協ヘテ。新ニ定メラレタルモノ也。391

また、「音便ノ事」の冒頭にも次のやうに述べてゐる。

字音ノ物ノ名ナドモ。常ノ言ニハナダラメテ。「オ」ヲ「サエ」。「芭蕉」ヲ「ハセヲ」。「襖」ヲ「アヲ」。「簞箆」ヲ「ヒチリキ」。「双六」ヲ「スゴロク」。「博士」ヲ「ハカセ」。「消息」ヲ「セウソコ」。「朱雀」ヲ「スサカ」ナドヤウニ。皇国言ニ近ク転ジテ呼タリキ。423
要するに、音便が和語を字音のやうに呼ぶのに対して、この場合は字音を和語のやうに呼ぶからである。つまり、結果が同じでも過程が異なるのである。

- (4) 宣長はこの音便が時代的にも古く、音便が音便のやうに思はれないものは奈良時代の末期からの用例であることを注意してゐる。そして、音便であることは、古言にはウが語中・語尾には存在しないからであると説明してゐる。

音便ノウノ。本語ノ如ク聞ユル者アリ。凡テ古言ニハ。中下ニウノ音アルモノハヲサヽ、見エズ。奈良ノ御代ノ末ツ方ヨリコレカレアリ。425

- (5) さて、用例を整理すれば表2のやうになる。（「入声ノ韻ヲナダラメ」たものには「□」を記し、「本語ノ如ク聞ユル者」には「○」を記す。また、【 】は宣長の注である。以下、同様とする。）

5.3 ント云フ音便

- (1) この音便においては、全体を通じて見られる観点以外として、散文と韻文の区別がある。しかし、雅言の下位区分にすぎない。

物語文ヲヨムニ多ク。サイバラニモ。「美濃山ニ繁（シジニ）ニ生（オヒ）タル」ヲ「シンジニ生（オヒ）タル」。「我家（ワイヘ）」ヲ「ワイヘン」トウタヘル類アリ。【古本ニハ「之之爾（シジニ）」ト書キ。「和伊戸（ワイヘ）」ト書リ。】猿樂ノ謡ナドニモ多シ。【「捨（ステ）テケリ」ヲ「ステテンゲリ」トウタフタグヒナリ。】426

表2 ウト云フ音便

方法	本音	品詞	文体	本音の用例	音便の用例
添加		名	雅言	設（マケ） 八日（ヤカ） 夜（ヨサリ） 葬（ハムリ）	マウケ ヤウカ ヨウサリ ハウムリ
			字音	佐官（サクワン） 女官（ニヨクワン） 女房（ニヨバウ） 夫（フ） 婦 牡丹（ボタン）	サウクワン ニヨウクワン ニヨウバウ フウフ ボウタン
		動	雅言	賜（タブ）	タウブ
			漢籍	ノタマハク	ノタウマク
		形動	雅言	清（キヨ） ラ	キョウラ
		接	漢籍	然而（シカシテ）	シコウシテ
		変化	マ	名	雅言
動	雅言			御座（オハシマス） 宣（ノタマフ）	オハサウズ ノタウブ
ミ	名		雅言	上野（カミツケ） 小路（コミチ） 手水（テミヅ） 髪搔（カミカキ） 畳紙（タタミガミ） 頭（カミベ）	カウヅケ コウヂ テウヅ カウガイ タ、ウガミ ○カウベ
ム	名		雅言	日向（ヒムカ） 多武峯（タムノミネ） 手向（タムケ）	ヒウガ タウノミネ タウゲ
	動		雅言	候（サムラフ）	サウラフ
ハ	名		雅言	伯耆（ハハキ） 箒（ハハキ） 吹革（フキガハ） 革堂（カハダウ）	ハウキ ハウキ フィガウ カウダウ
ヒ	名		雅言	真人（マヒト） 首（オヒト） 韓櫃（カラヒツ） 折櫃（ヲリビツ） 舅（シヒト） 夫（ヲヒト） 弟（オトヒト） 妹（ヒモヒト）	マウト オウト カラウト ヲリウヅ ○シウト ○ヲウト ○オトウト ○イモウト

		動活	雅言	賜（タマヒケリ）	タマウケリ
		漢籍		言而（イヒテ） 思而（オモヒテ） 問而（トヒテ） 從而（シタガヒテ）	イウテ オモウテ トウテ シタガウテ
	フ	—	口語	—	—
		名	字音	法師（ホフシ）	□ホウシ
	ヘ	名	雅言	卿（マヘツキミ）	マウチギミ
		動	雅言	仕奉（ツカヘマツル）	ツカウマツル
	ホ	名	雅言	直会（ナホラヒ） 直衣（ナホシ）	ナウラヒ ナウシ
	カ	名	雅語	冠（カヅプリ）	○カウプリ
	ク	名	雅言	藁烏（ワラグツ） 下烏（シタグツ） 専（タクメ）	ワラウヅ シタウヅ ○タウメ
			字音	隔子（カクシ） 冊子（サクシ） 陌子（ヒヤクシ） 冒額（モウガク） 族（ゾク）	□カウシ □サウシ □ヒヤウシ □モカウ □ゾウ
		形活	雅言	ヨク アシク	ヨウ アシウ
	ヤ	副	雅語	漸（ヤ、ヤ、）	○ヤウヤウ【「ヤウヤク」 ト云ハ後ノコトカ。】
	リ	名	雅言	取出（トリイデ）	トウデ
	キ	名	雅語	詣（マキデ）	○マウデ
	ヲ	動	雅語	申（マヲス）	○マウス

(2) この音便においても、全体を通じて見られる観点以外として、口頭語と文章語との区別および中央語と方言との区別がある。

言ノ首ノムヲ。口語ニント云者アリ。【仮字ニハムト書ク。】……【是レハムノ下ヲマノ行ノ音ト。ハノ行ノ濁音トニテ承タル言ニカギレル音便也。サテ此ノムハ。素ハ皆ウナリシガ。中古ヨリムニナレル也。「生（ムマル）」「埋（ムモル）」「野干玉（ムバタマ）」ナドノムハ。今モウトモ書ク也。サレドソレモ口語ニハミナント呼ベリ。右ノ内ニ「野干玉」ハ。本ハ「ヌバタマ」ナリシガ。ウトナリムトナレル也。サテ件ノ言ドモ。今時モ皆ウノ如ク呼ブ国モアルヲ。方言トテ京人ハ笑フメレド。コレ返テ辺土ニ古ヘノ正言ノノコレルナリ。】427

また、口頭語における表現意図を置いた用例を挙げてみる。

又力(チカラ)ヲ入レテ云事ニ。「真中(マナカ)」ヲ「マンナカ」。「真円(ママロ)」ヲ「マンマル」。「唯(タダ)」ヲ「タンダ」。「今(イマ)」ヲ「インマ」。「手々(テデ)ニ」ヲ「テンデニ」ト云類イト多シ。426

また、古言の語法について述べてゐる。

【「親(シタ)シクスル」ヲ「シタシミス」。「疎(ウト)クスル」ヲ「ウトミス」ト云類ハ。古言ノ格也。此例万葉集ノ歌ニ多シ。サレバ後世ノ漢籍ヨミハ。古言ノ遺リタルガ。音便ニクヅレタルモノナリ。】426

- (3) 注意すべきことは、宣長は「真字」と「南」とを音便としてゐるが、『玉勝間』「かなまんな ひんがしみんなみ」においては音便であることを次のやうに否定してゐることである。

仮字[カナ]をかななどといふべし、真字[マナ]をまんなといへるは、ひがことなり、……又南[ミナミ]をみんなみといふも、ひがこと也、……そも、音便にて、んを添へいふ言も、多かれど、此まんなみんなみは、其例にはあらで、かなひんがしにならひたる、みだりごととなりかし、243

- (4) 上古におけるンノ非存在について宣長は考察してゐる。まづ、助動詞「む」はムと発音してゐたことを、係り結びによる活用形の変化や万葉集などの表記から論証してゐる。

凡テ此類辞ノンモ。古ヘハ皆サダカニムト呼シナルベシ。其故ハ。上ニコソト云辞アレバ。ン転ジテメトナル。是レムト通音ナル故也。ンニテハ通音ニ非ズ。其外モ万葉集ニ。「稲見(イナミノ)川」ヲ「将行乃河(イナミノカハ)」。「三室山」ヲ「将見円山(ミムロヤマ)」ナドトモ書キ。「見(ミ)ム」「聞(キカ)ム」ナドヲ。「ミモ」「キカモ」トモヨミテ。後ニ和泉式部ガ歌ニスラ。「見(ミ)セム」「聞(キカ)セム」ヲ。「ミセモ」「キカセモ」トヨミタリ。コレラモ「マミムメモ」ハ通音ナル故也。若シンナラムニハ。ミトモトモ転用スベキ由ナシ。426

また、その前提として、上古においては仮字と音声とが対応してをり、音声の差別は仮字の差別であることを述べてゐる。

或人云ク。古言ニンノ音ナシトハ云ベカラズ。今ノ世ニント呼フ音ハ。古ヘモント呼シ也。然ルニ古書ニハソレヲモ皆ムト書ルハ。ソノカミンノ音ニ書ベキ仮字ノナカリシ故也ト云ハ非也。若シ古言ニンノ音ナラバ。ムノ仮字ノ外ニ。別ニ其仮字モアルベキニ。古ヘハ其仮字ナクシテ。皆「牟(ム)」「武(ム)」等ノ仮字ヲ用ヒテ。サダカニムト呼ブ音ト差別ナカリシハ。共ニサダカニムト呼シ故也。凡テ古ヘノ仮字ノ用ヒザマハ。甚精嚴ナリシ事ヲ。ヨク知レラム人ハ疑フベカラズ。426

- (5) 地名とそれを表記する字音との関係について述べてゐる。音便と地名における字音とは混同してはならないことを宣長は注意してゐる。

【サイバラ古本ニ。「名无波乃字美(ナムバノウミ)」トアレバ。是レモヤ、古キコトニテハアル也。サテ「タン」「ナン」ハ「丹」「難」ノ字ノ音ナレバ。却コレヲ正シト思フ

人モアルバ。大ナルヒガコ、ロエ也。コレハ本「タニハ」「ナニハ」ト云名ニ。後ニ音ノソレニ似タル字ヲ借りテ書ルノミナレバ。字ノ本音ニハ泥ムベキ事ニ非ズ。中昔ヨリ「タンバ」「ナンバ」ト云ハ。字音ニ依レルニハアラズ。音便ニニヲ_ント云ナセルモノ也。凡テ諸国郡郷等ノ名ニ。字音ヲ用ヒタル者ハ。皆仮字ニテ。タゞ似ヨリタル音ヲ取レルノミナレバ。其本音ニ泥ムベカラザル事也。然ルヲ儒者ナド。タゞ其字ニナヅミテ。「武蔵」「安房」「信濃」「因幡」「播磨」「対馬」ナドノ類ヲモ。本ハ皆本音ノ如クナリケムヲ。後ニ唱ヘ訛レルモノト心得ルハ。地名ノ仮字ノ例ヲ知ラズ。本末ヲ辨ヘ察セザルモノ也。コレヲモ古書ニハ。「身刺（ムザシ）」「淡（アハ）」「科野（シナノ）」「稲羽（イナバ）」「針間（ハリマ）」「津嶋（ツシマ）」ナドトモ書ルヲ見ズヤ。】427

なほ、この歴史的事情については、『地名字音転用例』の冒頭に次のやうに述べてゐる。

凡ソ諸国ノ名、又郡郷ナドノ名ドモ、古ヘハ文字ニカ、ハラズ、正字ニマレ借り字ニマレ、アルベキマ、ニ、……ヤ、後ニナリテ、字ヲ扱ブコト始マリ、又必ズ二字ニ定メテ書クコトトハナレルナリ、……サテ国郡郷ノ名、カクノ如ク好字ヲ扱ビ、必ズ二字ニ書クニツキテハ、字音ヲ借りテ書ク名ハ、尋常（ヨノツネ）ノ仮字ノ例ニテハ、二字ニ約（ツヅ）メガタク、字ノ本音ノマ、ニテハ其名ニ叶ヘ難キガ多キ故ニ、字音ヲサマゞ、ニ転ジ用ヒテ、尋常ノ仮字ノ例トハ、異ナルガ多キコト、「相模（サガミ）」ノ「相（サガ）」、「信濃（シナノ）」ノ「信（シノ）」ナドノ如シ、437

(6) 古くからの字音語におけるンの変化について述べてゐる。ンは「鼻声ニシテ不正」であるので、変化させるか省略するか of のいずれの方法によつて和語のやうに呼んだ用例を挙げてゐる。整理すれば表3になる。(用例の「古キ物」には「[古]」を記す。)

表3 ンの変化と省略の用例

変化	ニ	蘭ラニ 紫苑シヲニ 牽牛子ケニゴシ 木欒子ムクレニジ 銭ゼニ
	ミ	燈心トウシミ 正身サウジミ 汗衫カザミ
	ヌ	薫衣香クヌエカウ
	ノ	近衛コノエ
	イ	紫宸殿シシイデン 冷泉レイゼイ 面目メイボク
省略	語中	文字モジ 反故ホグ 巾子コジ 冠者クワザ 本意ホイ 案内アナイ 念仏ネブツ [古] 延喜エギ
	語末	対面タイメ 精進サウジ [古] 喜撰キセ [古] 右近ウコ

そして、ンの音便と表記の関係について述べてゐる。

(A) 片仮字ノ_ンモ。平仮字ノ_んモ。後世ニ出来タル字ニテ。中昔マデハコレノ仮字ハナカリシ故ニ。……(B) 口語ニ音便ニテ_ント呼ブ言出来テ後ニモ。_ム・_むノ字ヲ借りテ書シガナラヒトナリテ。(C) 後世ツヒニ_ム・_むト_ン・_んトヲ混ジテ分タズ。通ハ

シ書テ。(D) 中下ナルヲバ凡テ皆_ン・_ント書カラ。中ゴロマデハ_ムト読シ言モ。皆_ント読ムコトニハナレル也 428。

これを整理すると表4になる。

表4 語中語尾のムとンの表記と発音

	表記	発音
A	ム	む
B	ム	む ん
C	ム シ	む ん
D	ン	ん

(7) さて、用例を整理すれば表5になる。('古言ノ格'には「[格]」を記し、「カラ入レテ云」ものには「△」を記す。以下、同様とする。)

表5 ント云フ音便

方法	本音	品詞	文体	本音の用例	音便の用例
添加		名	雅言	真字 (マナ) 南 (ミナミ) 抽 (ヌキデ) 我家 (ワイヘ)	マンナ ミンナミ ヌキンデ ワイヘン 【サイバラ】
			俗言	備後 (ビゴ) 豊後 (ブゴ) 豊原姓の「豊」(ブ) 仮腹 (サジキ) 役小角 (エノヲツヌ) 真中 (マナカ)	ビンゴ ブンゴ ブン サンジキ エンノ行者 △マンナカ
			漢籍	真円 (ママロ) 鑑 (カガミ)	△マンマル カンガミ
		動	雅言	誦 (ズ) シ	ズンジ
			漢籍	[格] 好 (ヨミス) [格] 悪 (ニクミス)	ヨミンズ ニクミンズ
		助 助動	雅言	ナド 捨 (ステ) テケリ 不者 (ズバ)	ナンド ステテングリ 【猿楽ノ謡】 ズンバ
			漢籍	トキハ	トキンバ
		副	雅言	繁 (シジニ)	シンジニ 【サイバラ】
			俗言	唯 (タダ) 今 (イマ) 手々 (テデ) ニ	△タンダ △インマ △テンデニ

変化	ミ	名	雅言	臣（オミ） 朝臣（アソミ） 忌部（イミベ） 公等（キミタチ） 公卿（カミタチベ） 大御（オホミ） 戒（イミコト） 筆（フミデ） 笄（カミサシ） 弓手（ユミデ）	オン アソン インベ キンダチ カンダチベ オホン インコト フンデ カンザシ ユンデ
			漢籍	涙（ナミダ）	ナンド
		動	俗言	（漢籍読に同じ）	（漢籍読に同じ）
			漢籍	[格] 親（シタシミ）ス [格] 疎（ウトミ）ス [格] 賤（イヤシミ）ス [格] 重（オモミ）ス [格] 軽（カロミ）ス	シタシンズ ウトンズ イヤシンズ オモンズ カロンズ
		動活	俗言	（漢籍読に同じ）	（漢籍読に同じ）
			漢籍	読（ヨミ）テ 清（スミ）テ 富（トミ）テ 積（ツミ）テ	ヨンデ スンデ トンデ ツンデ
	ム① 語中	名	雅言	神某（カムナニ） 汝（ナムヂ） 東（ヒムカシ） 菅田（ホムダ） 茨田（マムタ）	カン某 ナンヂ ヒンガシ ホンダ マンダ
	ム② 語尾	助動	雅言	ユカム カヘラム ケム ラム ナム テム	ユカン カヘラン ケン ラン ナン テン
	ム③ 語頭	動	口語	生（ムマル） 埋（ムモル）	ンマル ンモル
		形		味（ムマシ）	ンマシ
		形動		諾（ムベ）	ンベ
		名		馬（ムマ） 梅（ムメ） 棘（ムバラ） 野干玉（ムバタマ）	ンマ ンメ ンバラ ンバタマ

モ	形動	雅言	懇（ネモコロ）	ネンゴロ
ニ	名	雅言	丹波（タニハ） 難波（ナニハ） 大贄・大嘗（オホニヘ） 掃部（カニモリ）	タンバ ナンバ オホンベ カンモリ【今時「カモン」 ト云ハ殊ニ訛レル者也。】
	副	漢籍	何（ナニ）ゾ 如何（イカニ）	ナンゾ イカン
	助動	漢籍	成（ナリ）ニシ 遂（トゲ）ニシ	ナリンジ トゲンジ
ヌ	名	雅言	絹垣（キヌカキ）	キンカイ
リ	名	雅言	仮字（カリナ） 退出（マカリデ） 衛所（マモリドコロ） 後取（シリトリ） 件（クダリ）	カンナ マカンデ マンドコロ シンドリ クダン
	動活	漢籍	成（ナリ）ヌ 去（サリ）ヌ 終（ヲハ）リヌ	ナンヌ サンヌ ヲハンヌ
ル	名	雅言	夜御殿（ヨルノオトド）	ヨンノオトダ
	動活	雅言	有（アル）ベン 有（アル）メリ アルベカルメリ	アンベシ アンメリ アンベカンメリ【「アベカ メリ」ト書タル】
ハ	名	俗言	童部（ワラハベ）	ワランベ
ヒ	名	俗言	主水（モヒトリ） 築土（ツキヒヂ）	モンドリ【今時ハ「リ」ヲ 略テ「モンド」ト云リ。】 ツインヂ
	動	俗言	（漢籍読に同じ）	（漢籍読に同じ）
		漢籍	思看（オモヒミル） 慮（オミヒハカル）	オモンミル オモンパカル
	動活	俗言	（漢籍読に同じ）	（漢籍読に同じ）
		漢籍	及（オヨビ）テ 忍（シノビ）テ 並（ナラビ）テ	オヨンデ シノンデ ナランデ
	副	雅語	殆（ホトホト）	ホトンド

5.4 ウトモン_トモニヤウニ云フ音便

(1) ウとンの音便の併存する用例の価値について述べてゐる。ウの方がンよりも雅であるとする。

「ユカム」「カヘラム」ノ類ノ_ムモ。古ヘハ皆サダカニ_ムト呼ヒケムヲ。【此事上ニ云リ。】後ニ音便ニテ_ントモ_ウトモ云。「ユカン」「カヘラン」。「ユカウ」「カヘラウ」ノ如シ。此ニツノ中ニ。「ユカン」「カヘラン」ノ類ハ雅言。「ユカウ」「カヘラウ」ノ類ハ俗言ノヤウナレドモ。ニツ共ニ後ノ音便ナレバ。必シモ_ンヲ雅トモ。_ウヲ俗トモ定ムベキニ非ズ。音ニ就テイハバ。返テ_ウハ雅。_ンハ俗トスベシ。上ニ出セル。_ウトモン_トモニヤウニ云フ言ドモノ例モ。多クハ_ウハ雅ニ近ク。_ンハ俗ニ近キゾカシ。429

また、「再ビ音便」による変化と、方言におけるその更なる変化について述べてゐる。

【サテ此ノ「ユカウ」「カヘラウ」ノ類ノ_ウヲ。口語ニハ又再ビ音便ニテ_ヲト云。「ユコヲ」「カヘロヲ」ノ如シ。是ハ上ニ云ルハヒフヘホヲワキウエヲト云音便ノ中ノ_ウヲ。又音便ニ_ヲト云。其格ト全ク同ジ。サテ鄙言ニハ又ツヒニ其ノ_ヲヲ略キテ。「ユコヲ」ヲ「ユコ」。「カヘロヲ」ヲ「カヘロ」トヤウニ云ナリ。】429

(2) ウとンの音便が併存する用例を挙げてゐる。ただし、雅言と俗言を区別してゐない。これを整理すれば表6になる。

表6 ウトモン_トモニヤウニ云フ音便

本音	本音の用例	音便ウの用例	音便ンの用例
ミ・ム	神某（カミ某・カム某） 巫（カムナギ） 嫗（オムナ） 女（ヲミナ） 大神（オホミワ） 諸ノ司ノ長官（カミ）	カウ某 カウナギ オウナ ヲウナ オホウワ カウ	カン某 カンナギ オンナ ヲンナ オホンワ カン
メ	笋（タカメナ）	タカウナ	タカンナ
ビ	商人（アキビト）	アキウド	アキンド
ヘ	仕奉（ツカヘマツル）	ツカウマツル	ツカンマツル
ガ	冠（カヅブリ）	カウブリ	カンブリ
未詳	考【本語未詳】	カウガヘ	カンガヘ

5.5 急促ル音便

(1) 宣長はこの音便と外国の入声とを表記するために新たに「ッ」を導入してゐる。『漢字三音考』「外国ノ音正シカラザル事」において次のやうに述べてゐる。

○外国ノ入声ハ。皇国ノ字音ノ入声ノ如キ。クキツチフ等ノ顕ナル韻ハ無クシテ。単音

ノ如クナレドモ。正シキ単音ニハ非ズ。其尾物ニユキアタリタル如クニ急促リテ。喉ノ内ニ隠タトシテ韻ヲ帶ベリ。……故ニ今此書ニ入声ノ形ヲ云フニハ。仮ニ其音ノ下ニツ点ヲ施シテ識トス。日月ノ唐音ヲジツエツト書クガ如シ。コレ新奇ヲ好ムニ非ズ。其韻ヲ示スベキ仮字ナキガ故也。384

- (2) この音便では、文体の区別が明確にされてゐない。漢籍読と俗言に多いと述べるにすぎない。また、特に俗語において表現意図による例を挙げてゐる。なほ、字音の用例もあるが、それは後述の字音連用の音便において挙げられてゐる。

凡テ急促ル声ハ。殊ニイヤシキ故ニ。古言ハサラニモイハズ。中古マデモ雅言ニハ是レアル事ナシ。故ニ今トテモ歌書ナドヲ読ニハ。コレヲマジフル事ナシ。此音便ハタゞ漢籍ヨミト。俗語トニノミ多クシテ。俗語ニハ力（チカラ）ヲ入レテ云フ言ニハ。……429

- (3) 注意すべきことは、本音がウであるものは既に音便したものであることである。それには二つある。即ち、ウを添加したものとウに変化したものとである。

ウを添加：佐官

ウに変化：真人・夫・言テ・迫而・従テ

- (4) 音便と清濁について規則を述べてゐる。

音便ノウ・ン下ハ。凡テ清音モ濁ラル、ハ皆濁ル例ナルニ。此急促ル声ノ下ハ濁ル例ナク。濁音ノ上ハ急促ル例ナシ。急促ル声ノ下。ハノ行ノ音ナレバ必半濁音ニナル也。これを整理すれば表7になる。

表7 音便と清濁

上	音便ウ	音便ン	音便ッ
下	濁	濁	清音・半濁

- (5) 急促ル声は不正であるので、上古においては省略する場合があると述べてゐる（ンも同様に省略する場合があることは、表3を参照）。

次ニ急促ル声ト。ハノ行ノ半濁音トハ。殊ニ不正鄙俚ノ音ナル故ニ。中古マデハサラニモイハズ。今時トテモ歌物語ナドヲ読ムニハ。ヲサ、コレヲマジフル事ナシ。字音スラ入声連用ノ急促ル韻ヲバ。多クハ省キテ。日記ヲ「ニキ」。絶句ヲ「ゼク」。律師ヲ「リシ」。読経ヲ「ドキヤウ」トヤウニヨミ。達智門ヲタ「テイモン」ト唱ルヨシナド物ニ見エ。日本ハ今モ「ニホン」トモ呼ベバ。古ヘハサラ也。法華經ハ今モ「ホケキヤウ」トノミ云リ。431

- (6) さて、用例を整理すれば表8になる。

表 8 急促ル音便

方法	本音	品詞	文体	本音の用例	音便の用例
添加		名	俗言 漢籍	備中（ビチュウ） 服部（ハトリ） 訟（ウタヘ）	ビッチユウ ハットリ ウッタヘ
		形動	俗言	眞白（マシロ） 真更（マサラ）	△マツシロ △マツサラ
		副	俗言	唯（タダ） 毎（イツモ）	△タッタ △イツツモ
			俗言 漢籍	全（マタク） 最（モトモ） 可怜（アハレ）	マツタク モットモ アツパレ
変化	ウ	名	俗言 漢籍	佐官（サウクワン） 真人（マウト） 夫（ヲウト）	サックワン マツト ヲツト
		動活	俗言 漢籍	言（イウ）テ 追而（オウテ） 従（シタガウ）テ	イッテ オツテ シタガツテ
	フ	名	俗言 漢籍	新田（ニフタ）【本ハニヒ タ也。】	ニツタ
		形	俗言 漢籍	貴（タフトシ）	タツトシ
	ツ	名	俗言 漢籍	奴（ヤツコ）	ヤツコ
	リ	動	俗言 漢籍	欲（ホリス） 則（ノリトル）	ホッス ノツトル
		動活	俗言 漢籍	返（カヘリ）テ 因（ヨリ）テ 成（ナリ）テ	カヘツテ ヨツテ ナツテ

5.6 ハヒフヘホノ半濁ノ音便

(1) この音便において、全体を通じて見られる観点以外として、シの音便や急促ル音便と同様に、表現意図がある。

字音ナラヌハ。漢籍読ニ……。又軍書ナドニ。……。又俗言ニ……。皆カヲ入レテ強メタル語也。430

(2) 注意すべきことは用例に軍書からのものがあることである。その文体について『玉あられ』『漢文ぶりの文』において次のように批判してゐる。

近世人の文に、ことさらに漢文のふりを好みて、多くかきまじふるは、殊にうるさきわ

ぎ也、そはもと雅文をえざるからのしわざにて、つたなさをまぎらかさんとてぞ、さもまことの漢文は、もじの顛倒、助字のおきやうなど、何くれとむつかしくところせきを、假字書にては、さやうのすぢにも力いらず、たゞ假字書キにしたる漢国の軍書やうの物を見ても、かゝるゝわざなれば、いとたやすくして、俗人の耳には、物々しく、物しりめきて聞ゆるを、たけき事に思ふめる、いと心ぎたなきわざならずや、昔のよき文には、たとひまれゝゝに、もろこしぶみなる事をかけるも、ことばつきはこのふりにこそ物したれ、かしこのふりのまゝには、かけることなし、又字音の詞もあれども、それはたつかひさまつづけさまは、こゝのふりなるをや、515

- (3) この音便が「連声ノ便」であることを述べてゐる。

凡テ此音便モ殊ニイヤシキ故ニ。雅言ニハコリアル事ナクシテ。今ノ世トテモ歌書ナドヲヨムニハ。是ヲマジフル事ナク。タゞ漢籍ヨミト俗言トニノミ多シ。【此ノハノ行ノ半濁ハ。アルガ中ニイヤシキ音ニテ。皇国ニハ今時ノ俗語トイヘドモ。タゞ連声ノ便ニノミコソアレ。言ニモ字音ニモ。首〔ハジメ〕ニハコリアルコトナキヲ。漢国ナドニハモトヨリ此音ナルモノ多キハ。其不正鄙俚ナル事云モサラナリ。】430

- (4) この音便となる条件を述べてゐる。即ち、字音のンと急促の下である。

凡テ此音便ハ。急促ル声ノ下ト。字音ノンノ下トニ局レリ。【字音ノンノ下ノハノ行ノ音ハ。或ハ濁リ或ハ半濁ニ呼也。皇国ノ言ノンノ下ノハノ行ノ音ハ濁ルナリ。半濁ニ呼ブ例ハヲサゝ、オボエズ。何人（ナンピト）ナド云ハタマサカノコトナリ。】430

ただし、上古においてはハ行は半濁音とならなかつたと推定してゐる。

天平寛平ナドノ平ノ字。三品ノ品ノ字ナド。凡テンノ下半濁音モ。古ヘハ今ノ如ク半濁ニハヨマズ。濁リテヨミ。急促ル韻ノ下ノ半濁モ。古ヘハ或ハ一品ヲバ「イチホン」ナドトヨミ。或ハカノ日本ヲ「ニホン」トヨム如クニナドヨミテ。凡テ上ノ急促ル韻ヲ避テ。下ヲ半濁音ニナラザルヤウニゾヨミツラム。【上ノ急促ル韻ヲ避レバ。オノヅカラ半濁音ハ出ザル事也。】……。431

要するに、次のやうになる。

表9 八行の清濁

上古	上①	字音ン	和語ン	—
	下①	濁	濁	清
中古	上②	字音ン	和語ン	ツ
	下②	濁・半濁	濁	半濁

- (5) さて、用例を整理すれば表10になる。(表中、音便の用例を挙げてゐないものは、それを補ひ〈 〉を記す。)

表 10 ハヒフヘホノ半濁ノ音便の用例

方法	本音	品詞	文体	本音の用例	音便の用例
変化	ハ	名	漢籍	迫入（オヒハメ）	ボツパメ【軍書】
			字音	烟一波 結一髪	〈エンーパ〉 〈ケツーパツ〉
		動	漢籍	慮 ヨク引テ	オモンパカル ヨツピイテ【軍書】
		副	漢籍	専	モツパラ
			俗言	— —	△アツパレ △ヤツパリ
		助	漢籍	トイフハ	トイツパ
	ヒ	名	漢籍	何人	ナンビト【タマサカ】
			字音	天一平 寛一平 三一品 橘一皮	〈テンーピヤウ〉 〈カンーピヤウ〉 〈サンーピン〉 〈キツーピ〉
		形動	字音	彬一々	〈ヒンーピン〉
		副	俗言	—	△マツピラ
		フ	名	字音	南一風 匹一夫
	副		俗言	—	△タツプリ
	ヘ	名	字音	岸一壁 雪一片	△〈ガンーペキ〉 〈セツーペン〉
		副	俗言	—	△スツペリ
	ホ	名	字音	反一哺 一一方 一一品 日一本	〈ハンーボ〉 〈イツーパウ〉 〈イツーポン〉 〈ニツーポン〉
		副	俗言	—	△コツポリ

5.7 字音連用ノ音便

(1) この音便は喉音三行であるア・ヤ・ワ行音の変化であり、上にンと急促ル韻があることが条件である。注意すべきことは、ンは音便であるとは限らないが、急促ル韻は必ず音便であることである。そして、規則的には、上にンがあればナ行音となり、また上に急促ル韻があればタ行音となるといふ変化である。

字音連用ニ。ア・ヤ・ワノ行ノ音ハ。ンノ下ト急促ル韻ノ下トニアルトキハ。他ノ音ニ変ヅル例多シ。ンノ下ニアレバナノ行ノ音トナル。……急促ル韻ノ下ニアレバタノ行ノ音トナル。431

また、ンの例外として、上にンがあるがマ行音となる例と、上にンがなくマ行音となる例とを挙げてゐる。

此外「三位」ヲ「サンミ」。「陰陽」ヲ「オンミヤウ」ト呼ブナドハ稀ナル例也。【「経営」ヲ「ケイメイ」ト云ハ。ンノ下ナラネドモ此例也。然ルニ此「ケイメイ」ヲ。「敬命」トスルハアタラヌ事也。】431

さらに、字音連用ではない例を挙げてゐる。即ち、助詞ヲ・ハの例である。助詞のハは口頭語ではワとなるので、この音便になるとする。

サテ又漢籍ヨミニハ。ヲ・ハ等ノ辞ヲモ此音便ニ呼ブ事アリ。「仰天」ヲ「天ノ仰グ」。「仁者人也」ヲ「仁ナ人也」トヨミ。「以一」ヲ「一ツト以テ」。「実ハ」ヲ「実タ」トヨム類是ナリ。【ハニハ此音便ノ例ハナキ事ナレドモ。口語ニワト呼ブユエニ。ア・ヤ・ワノ行ノ音ノ格ニナレルナリ。】431

(2) さて、用例を整理すれば表 11 になる。

表 11 字音連用ノ音便の用例

上の音	音便	文体	音便の用例	
ン	ナ行音	字音	先王 陰陽 雲雨 因縁 安穩	センナウ インニヤウ ウンヌ インネン アンノン
		漢籍	天ヲ仰グ 仁ハ人也	天ノ仰グ 仁ナ人也
	ミ	字音	三位 陰陽	サンミ オンミヤウ
イ	メ	字音	経営	ケイメイ
ツ	タ行音	字音	越王 八音 悉有 闕腋 舌音	エツタウ ハツチン シツツ ケツテキ ゼツトン
		漢籍	一ヲ以テ 実ハ	一ツト以テ 実タ

6. をはりに

以上、宣長の音便論の内容を整理して検討した。契沖や文雄の説との比較については別に論じよう。

引用文献

- 大野 晋〔編〕（1968）「うひ山ぶみ」「玉勝間」『本居宣長全集 第一巻』筑摩書房
〃 （1970）「漢字三音考」「玉あられ」「地名字音転用例」『本居宣長全集 第五巻』筑摩書房
〃 （1968）「古事記傳」『本居宣長全集 第九巻』築摩書房

◇

- 岸田武夫（1984）『国語音韻変化の研究』武蔵野書院
田辺正男（1976）『国語学史 三訂版』桜楓社（初版 1959）
林 史典（1989）「近世の漢字研究」『漢字講座 第2巻』明治書院

（2014 年 10 月 21 日 受理）